

二〇二〇年度 入学試験問題

国 語

第二回

【注 意】

- ・試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・問題は一ページから七ページまでです。
- ・解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- ・字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

まず手始めに、⁽¹⁾「障害」とは何か、を考える上で、まったく対照的な二つの考え方を紹介したいと思います。

日本には、「障害者基本法」という法律があり、2011年（平成23年）に改正される以前は、障害とは身体障害・知的障害・精神障害の三つに分類されてきました。

また、行政の福祉サービスを受けるには、指定医師の診断や専門家の判定に基づき、それぞれ「身体障害者手帳」「療育手帳」「精神障害者保健福祉手帳」という手帳の交付を受けることが義務づけられており、たとえば、身体障害を例にとると、肢体不自由・視覚障害・聴覚障害・内部障害などの障害（²）シユベツと、障害の重さによって1〜7級の等級があり、6級まで手帳が交付されます。

つまり、障害とは、病気やケガなどによって生じる医学的・生物学的な特質であり、障害の重さは、手帳の等級によって示されます。こうした考え方に代表されるような障害のとらえ方を、「障害の医学モデル（または、個人モデル）」といいます。

これに対して、1970年代頃から世界中で活発化した障害者運動や、多くの障害当事者たちの自立生活の実践などをへて、じつは「障害」とはそんな単純なものではないのではないか、という問題提起が行われるようになりました。

A、車いすに乗っている人でも、住んでいる地域にエレベーターが完備され、道に段差が少なければ、足が不自由であるという「障害」はかなりの部分、軽減されてしまいます。また、目が見えない、あるいは、耳が聞こえないという人でも、点字や手話を習得することで（それらを習得・活用できる環境をもっと整備することによって）、何不自由なくコミュニケーションができる例は珍しくありません。

B、障害の「重い・軽い」は、その人が暮らしている社会や環境しだいで、大きく変わりうるものであり、場合によっては、障害が「障害」でなくなってしまう可能性もあるのです。

つまり、障害者に「障害」をもたらしているのは、その人がもっている病気やケガなどのせいというよりは、それを考慮することなく営まれている社会のせいともいえるわけであり、こうした障害のとらえ方を「障害の

30

25

20

15

10

5

社会モデル」といいます。

従来の医学モデルにおいては、障害とはあくまで障害者個人に付随する特質（インペアメントといいます）と考えがちですが、社会モデルにおいては、人と社会との相互作用によって生じるのが障害（ディスプレイティといいます）であるという考え方をとります。

C、医学モデルにおいては、個々の障害者の側が、できるだけその障害を治療（³）やリハビリなどによって乗り越え、社会に（⁴）テキゴウできるように努力すべきだ、という方向でものごとを考えがちなのに対して、社会モデルにおいては、まず社会の側が、障害者にハンディキャップをもたらす要素を積極的に取り除いていくべきだ、という真逆の発想につながっていきます。

社会モデルの何がすぐれているのかというと、⁽²⁾に
つながる点です。また、それによって、たとえば、車いすの障害者のために設置されたエレベーターが、高齢者やベビーカーを押す人、あるいは、キャリアバッグを引く健常者たちにも大きな利便性をもたらすといったように、さまざまな生の条件を背負った人たちを許容する社会へと大きく広がる可能性を秘めていることです。

障害を、その人個人の責任とみるか、社会の責任とみるか、発想ひとつで、乗り越えるべきテーマや変革すべき社会のイメージも大きく変わってくることになります。

もちろん、すべてを社会のせいにして、社会を変革すればそれで万事、問題が解決するというわけではありませんが、これまでの福祉観や障害観というのが、あまりに医学モデル偏重で考えられすぎてきたのは確かです。思えば、「かわいそうな障害者」像や「けなげな障害者」像というものも、その（⁵）コンテイには、障害者が努力して障害を克服しようとする姿に感動を覚え、賞讃（⁶）するという、医学モデル的な障害観がひそんでいます。

そうではなくて、努力して障害を克服すべきなのは、障害者本人というよりは、まずは社会の側である、という視点でものごとを考えてみることに大切が必要です。

さて、先の「障害者基本法」は、2011年（平成23年）に抜本的に改正されることになりました。従来の身体障害・知的障害・精神障害の三つに加えて、「発達障害」と「その他の心身の機能の障害」という項目が付け加えられたほか、障害者とは、

60

55

50

45

40

35

「障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものをいう」

との条文が書き加えられました。

依然として、「障害者手帳」の制度は継続されていますが、障害というものが人と社会の相互作用によって生まれるという社会モデル的な発想が盛り込まれた点は、カツキ的といえます。「障害」とは何か、を考える上で、私たち一人ひとりの発想もまた、医学モデルから社会モデルへと大きくシフトしていく必要があります。

「福祉は天から降ってはこない」と福祉・医療の分野で著名なジャーナリストとして活躍する大熊由紀子さんは、その著書『福祉が変わる 医療が変わる』（ぶどう社）の中で書いています。

福祉先進国でも、福祉が天から降ってきたわけではない。住民に突き上げられ、隣あった国と国、町と町が競いあい、学びあって、そのスライジューンが上がっていった。

（『福祉が変わる 医療が変わる』より）

福祉制度というのは、住民の激しい「突き上げ」があつて初めて、ゆっくりとですが少しずつ前進していきます。

こうした「突き上げ」を日本において率先して行ってきたのが、1970年代頃から活発化した障害者運動でした。とりわけ、障害者施設や親元で「おとなしく」「けなげ」に暮らすことを拒み、障害があつても地域で普通に生活したいとして実践を重ねた障害者たちが巻き起こしたのが、「自立生活運動」と呼ばれる社会変革のための運動です。

D、「地域で普通に生活したい」といつても、その頃の社会は、障害者が生きやすいようにはつくられていませんでした。また、そもそも障害者は「住民」として認められていませんでしたから、彼らの試みは、あらゆる場面で、社会との摩擦や衝突を引き起こします。いつてみれば、⁽⁴⁾社会が、障害者に「おとなしく」「けなげ」であることを強いてくるのに対し、「そうはいかないぞ」とその枠から大きくハミ出ようとしたのが自立生活運動であり、それはまさに「異文化」どうしの激しいぶつかり合いだったといえます。

（渡辺一史『なぜ人と人は支え合うのか「障害」から考える』）

95

90

85

80

75

70

65

問一

——(1)「障害」とは何か、を考える上で、まったく対照的な二つの考え方」とありますが、これはどのような考え方ですか。六十五字以内で答えなさい。（句読点を含みます。）

問二

(2)に入る文としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 障害という問題を、単に個人の問題だけに押し込めるのではなく、家族全員でサポートし、乗り越えていこうという発想

イ 障害という問題を、単に個人の問題だけに押し込めるのではなく、さまざまな生の条件を背負った人たちにハンディキャップをもたらし要素を治療によって取り除こうという発想

ウ 障害という問題を、単に個人の問題だけに押し込めるのではなく、社会全体で問題を受け止め、解決していこうという発想

エ 障害という問題を、単に個人の問題だけに押し込めるのではなく、すべての人間が抱えている個性の一部であると考え、許容していこうという発想

問三

——(3)「自立生活運動」と呼ばれる社会変革のための運動」とありますが、この運動が目指すものとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地域のバリアフリー化

イ 障害者施設の充実

ウ 在宅介護費用の補助

エ 障害者家族へのカウンセリング実施

問四

——(4)「社会が、障害者に『おとなしく』『けなげ』であることを強いてくる」とありますが、これはどのようなことですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問五

本文中で、筆者は、障害という問題を考える上で私たちに必要なのは具体的にどのようなことだと言っていますか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問六

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア また イ たとえば ウ このように エ しかし

問七

――(ア)～(オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア 障害とは、社会的障壁（しやうへき）によって日常生活に制限を受けている状態であり、社会を変革することでしか乗り越えることはできない。

イ 障害とは、社会の環境（かんぎやう）次第で「重い・軽い」が大きく変わり得るものであり、必ずしも障害の等級が現実の不自由さの大きさを表すとは限らない。

ウ 障害とは、考え方や価値観によってとらえ方が異なるものであり、その人に障害があるかどうかは医学であっても決して判断することができない。

エ 障害とは、時代によって社会の受け止め方が変化するものであり、絶対的な治療法（ちりやうほう）が確立されているわけではない。

【2】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「くそ、見失った」

「どこ行ったんだろう」

ふたりはキョロキョロしながら歩いていく。広い駐車場を備えた薬局やコンビニが、畑の中にぽつりぽつりと建っている。のぞいたが、いずれにもレイの姿は見あたらない。

やがて視界の先に、五階建ての白くて大きな建物が見えてきた。刈りこまれた芝生に立つ頑丈そうな看板には『赤十字病院』の文字。クルマを回すスペースには自家用車やタクシーがひしめいている。ふたりは、芝生にそって整備されたスロープを上り、エントランスの前で足を止めた。自動ドアの向こうは広いロビーで、入院服姿の人や花を抱えた人などで混雑している。

(1) ふたりの前でドアが何度も開閉する。そのたびに消毒薬のおいとさざめきがあふれ出てくる。人々がふたりを邪魔くさそうによけて出入りしていく。

壮介に引っぱられて自動ドアの前から離れた秀明は首をひねった。

「ここじゃねえよな。本人どこも悪そうに見えなかったし」

「そうだね。あれだけ走れてるんだ、どこも悪くないだろう。もし来てたとすればだれかのお見舞いなんじゃないの」

「見舞いね。それでなんで泥だらけなわけ」

「泥とお見舞いは無関係なんですよ。というか、どうでもよくない?」

「オレは保健係なんだぞ。いっつも汚いかっこうしてさ、今日だってあいつにおどさ……頼まれて×を○にしてやったんだ」

苦わらいしながらメガネを上げた壮介が、視線の先に何かを見つけたらしく小さく声を上げた。

ガラス越しに、レイがやってくるのが見えた。無表情ながら眉尻に負ける気を含ませながら、レイがやってくるのが見えた。無表情ながら眉尻に負ける身を寄せた。

レイが自動ドアから出てくる。スロープを途中まで下りると芝生へふみこんだ。芝生には木製のベンチや噴水がしつらえられていて、入院患者と見舞客がくつろぐ姿が見える。レイは何かすごく重要なミッションがあるみたい、わき目もふらずに進んでいく。

30

25

20

15

10

5

ふたりがあとをつけていくと、病院の西側に出た。そちらは人があまりいなくて閑散としている。作業着に身を包んだおじいさんがリヤカーのかたわらで竹ぼうきを動かしているくらいだ。

病院の敷地の向こうには、リング畑や田んぼが広がり、その向こうに青くかすむ山が連なっていた。

レイは敷地の外にいた。

腰まで伸びた草にうもれるようにして、草をむしっては投げ、むしっては投げしている。授業中に眠りこけていた人と同一人物とは思えないくらい真剣な顔をしていた。

「何してんだろう」

「聞いてみたほうが早いよ」

秀明は、にらまれたらいやだな、と思いつながら一歩ふみ出した。何かをかけた。見下ろすと赤いランドセルだ。こんなところに放り出しておいで……

あらためてレイを見ると、親のかたきのようにこわい顔で草を抜きつつけている。

「おい国沢」

秀明が声をかけると、草に手をかけたかっこうでレイが顔を向けた。その目が見開かれる。「瞬」バツが悪そうな顔をした。身を起こすのにつられてブチブチブチと草が引っこ抜かれた。

「国沢、何してんだ」

「……草むしり」

抜いた草を遠くへ投げる。根っこがついた草は土をまき散らしながら放物線を描いてやぶに落ちた。風が吹いてくる。壮介がくしゃみを連発した。

「それはわかってるよ。なんで?」

どう見ても長い間放置された土地である。

「関係ないだろ」

「教えないと衛生チェックを書き直すぞ」

秀明はおどしてみた。あれは学期末に通知表とともに親に見せなければならぬのだ。

レイは舌打ちすると、

A

明かした。

「花を植えたいんだ」

「そこ、おまえんちの土地なの?」

60

55

50

45

40

35

「ちがう。ここで掃除の仕事してるおじいさんのもの」

話は終わったとばかりにふたりに背を向ける。壮介が、人の土地を勝手にいじってるのか、とあきれると、それが聞こえたらしくて「ちゃんと許可を取った」と反論した。

「そんなに植えたかったら美化係にでもなればよかったのに」

「ここじゃなきゃ意味がない」

手を止め、レイが病院を見上げる。ふたりもレイの視線の先を追って顔を上げた。西日が照らす窓のほとんどのカーテンが引かれているが、一か所だけ、五階のちようど草をむしっているところの正面にあたる窓だけはカーテンが開いていた。

「どこまでむしる気だ」

秀明がたずねると、レイは草の中を手でこぐようにして大きく円を描く。小さな虫がわっと空中に舞い上がって、秀明は見ているだけで

B

し

C

草の中を進むレイをふたりが目で見追う。レイが遠くなればなるほどふたりの顔色がどんどん悪くなる。レイが離れば離れるほど、ふたりの表情も徐々になくなる。

「こーこーまーでー」

手メガホンでさげんだレイが遠い。明日この世が終わると聞かされたら冗談だと思って「え、マジっすか」と

D

わらえるだろうが、今はわからない。なぜなら、その決然とした表情はかけねなしに「マジっす」だからだ。

「こんなに広いんじゃ、いつまでたつても終わらないんじゃないのー」
声を届けると、レイの顔つきが変わった。あらためて範囲を見わたしている。

車輪の音が近づいてくるのに気づいた。

「ほう、ずいぶんむしったねえ」

ほがらかな声に顔を向けると、リヤカーを引いたおじいさんだった。緑色の作業着を着て、麦わら帽子のひもを首元で結んでいる。リヤカーには竹ぼうきや熊手、芝刈り機、草がパンパンにつまって中に汗をかいているゴミ袋がいくつか積んであった。

作業着の胸元には清掃業者名がししゅうされている。

「君たちは手伝いに来たのかい？」

「手伝い？」

95

90

85

80

75

70

65

「レイちゃんの草むしりをだよ」

「いいえ」

壮介がメガネを押し上げる。レイがこっちを指し示してくる。

「おや、そうなのかい？ てつきり手伝いに来たんだと思ったんだ。だって友だちだろう？」

「友だち……」

(4) ちがいます、と否定しかけた壮介にかぶせて「そうです」と断言したのはレイだ。秀明は思わずレイに目を向ける。レイは赤い顔をして肩に力を入れ、おじいさんをまっすぐに見ている。

「いつもレイちゃんひとり来てたから心配してたけど、友だちがいてよかった。きつと安心するだろう」

おじいさんが病院をふりあおいで麦わら帽子のつばをちょいと上げた。秀明も窓を見上げる。レイがせき払いした。

「おじいさん、草むしりの道具をお借りしたいのですが」

「いいよ。終わったら用具置き場にもどしておいてくれればいいから」

「ありがとうございます。この場所を使わせてもらってる上に図々しくすみません」

「気にせんで。ここを放ったらかしにして荒らしておくよりずっといいから」

レイは秀明たちには見せたことがないほどいい子で、礼儀正しく頭を下げた。秀明と壮介は目くばせし合って肩をすくめる。

おじいさんが立ち去ると、さっそくりヤカーから鎌と熊手を取ったレイがふたりに押しつけた。

(5) 手伝え

「はあ？」

「なぜ」

秀明はムツとし、壮介は困惑顔。

「秘密を知ったんだから手伝うのが当然だろ」

「なんだよその理屈」

(6) ツルの恩返しにしろ、見るなの座敷にしろ、秘密を知ったら手伝うのが定番

「うん、まったくちがう。どこの昔話だ」

不毛な会話の間に壮介のくしゃみが差しはさまれた。メガネがずれる。

130

125

120

115

110

105

100

「国沢さん、花を植える理由は？」

「壮介がブンツと鼻をかみながらたずねる。」

「お母……か、患者さんがなくさめられるだろ」

レイは地面に視線を落として、どこかいじけたようにもらした。泥だらけの手でシャツをギュッとにぎっている。すねにはたくさん虫さされのあと。そしてレイがむしつた面積は、全体の五分の一ぐらい。

「よしわかった」

「秀明はこぶしを手のひらに打ちこんだ。」

「手伝ってやるよ」

「秀ちゃん」

「壮介が洗面をする。」

「虫、いるんだよ？」

「わかってるよ。でも、悪いことじゃないじゃん。花が咲いたら、あのカーテンを開ける患者さんが増えるかもしれない」

（高森美由紀「ブリリアントなサルビアを」）

問一

——(1)「ふたりの前でドアが何度も開閉する。そのたびに消毒液のおいとさざめきがあふれ出てくる。人々がふたりを邪魔くさそうにやけて出入りしていく。」とありますが、この時のふたりの様子としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふたりは病院の建物の中にいて、レイのことをずっと探していたため、ドアの向こうにある庭の様子を伺っている。

イ ふたりは病院の建物の外にいて、病院独特の雰囲気（ふんいき）に怖気づいてしまったため、思わず立ち止まっている。

ウ ふたりは病院の建物の中にいて、混雑によってレイの姿を見失ったため、辺りを見回して探している。

エ ふたりは病院の建物の外にいて、自分たちが正しい場所にいるのか自信がないため、足を踏み入れられずにいる。

問二

——(2)「その目が見開かれる。一瞬、バツが悪そうな顔をした。」とありますが、この時のレイの心情を解答らんに二行以内で答えなさい。

問三

——(3)「一か所だけ、五階のちようど草をむしっているところの正面にあたる窓だけはカーテンが開いていた。」とありますが、これはどのようなことか。表れですか。解答らんに二行以内で答えなさい。

問四

——(4)「ちがいます、と否定しかけた壮介にかぶせて『そうです』と断言したのはレイだ。」とありますが、壮介とレイの主張が食い違った背景としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア レイの言う通り、壮介とレイは友達関係とは言い難いが、レイは共通の友達である秀明が二人の間で板挟みになるのを避けようと考えた。

イ レイの言う通り、壮介とレイは友達関係と言って差し支えないが、壮介はレイを心の底では嫌っているため本音が出てしまった。

ウ 壮介が言いかけたように、壮介とレイは友達関係とは言い難いが、レイは壮介を友達だと紹介することで母親を安心させることができると考えた。

エ 壮介が言いかけたように、壮介とレイは友達関係と言って差し支えないが、壮介は初対面のおじいさんの前で本当のことを言うことができなかった。

問五

——(5)『手伝え』とありますが、ここからレイを手伝うことを承知するまでに、秀明の心境はどのように変化しましたか。五十五字以内で答えなさい。(句読点を含みます。)

問六

——(6)「ツルの恩返し」とありますが、鳥類に関連する次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 鳥なき里のこうもり
- 二 窮鳥懐に入れば獵師も殺さず
- 三 すずめ百までおどり忘れず
- 四 くちばしが黄色い
- 五 きじも鳴かずばうたれまい

〔意味〕

ア まだ年がわかくて、世の中のことを知らなかったり、ものごとをじゅうぶんにできなかったりすること。

イ 物事に秀でた人や強い人がいない場所では、実力のないものがいばるということ。

ウ よけいなことを言ったばかりに、自分から災難をまねくこと。

エ 追いつめられて助けを求めてきたものには、どんな理由があっても残こくにはできない、助けるのが人情である、ということ。

オ 小さいころに覚えたことは、年をとってからも忘れないということ。

問七

A D に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号は一回ずつ使用します。)

- ア へらへら イ ふしようぶしょう
ウ ぞわぞわ エ ずんずん

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんは、レイに対し、申し訳ないと感じつつも、彼が向けてくれる優しさを嬉しく思い様子を見守っている。

イ 秀明は、レイに対し、にらんできたりすぐに怒ったりする怖い奴という印象を抱いており、極力関わらないようにしている。

ウ 壮介は、レイに対し、衛生チェックの○と×を書き換えてやった貸しがあるため、強くものを言う傾向がある。

エ おじいさんは、レイに対し、理解と好意を向けており、彼が長い間放置していた自分の土地にレイが花を植えることに協力している。

